

第四章 光る源氏の物語 光る源氏世界の黎明

[第一段 学問と芸事の清談]

夜明け方近くなるほどに、ものいとあはれに思われて(光君はしみじみとした気分になり御成りになって)、御土器など参るついでに(おんかはらけなどまゐるついでに、御酒など御進みになりながら)、昔の御物語ども出で来て(昔を懐かしんで)、

「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに(私は漢文学を熱心に学びましたが)、少しも才など(すこしもごえなど、少しばかり知識が)つきぬべくや御覧じけむ(付き過ぎたかと御考えになったのでしょうか)、院ののたまはせしやう(故院が仰いましたのには)、

『才学といふもの(さいがくといふもの、修学というものは)、世にいと重くするものなればにやあらむ(世に非常に重要なものなので)、いたう進みぬる人の(それに深く進んだ人が)、命、幸ひと並びぬるは(長寿と幸福を両立させる事は)、いとかたきものになむ(大変に難しいもののような)。品高く生まれ(高貴な身分に生まれ)、さらでも人に劣るまじきほどにて(そうまでしなくても人に劣ることは無いのだから)、あながちにこの道な深く習ひそ(根を詰めて学問に深入りするな)』と、諫めさせたまひて(御注意下されなさって)、

本才の方々の(ほんざいのかたがたの、実際の諸技芸や儀礼の作法の方を)もの教へさせたまひしに(念入りに御教え下さりましたが)、つたなきこともなく(苦手としたものもなく)、またとり立ててこのことと心得ることもはべらざりき(また取り立てて是はと熱中したものもありませんでした)。「本才」は注に<『集成』は「実際の役に立つ技能。儀式、典礼など、政治家に必要な知識、技能。作詩、書道、舞、楽など諸方面が「かたがた」という」と注す。>とあり、諸辞書も此処の記事を参照に同様の説明となっている。「学問」との対比で考えれば、大体そういう事なのだろう。「才(ごえ)」と「才(かど)」の違いも分かり難いが、どちらも教養人の能力ではありそうだ。

絵描くことのみなむ(それでも絵を描くことだけは)、あやしくはかなきものなから(はっきりしない頼り無いものながら)、いかにしてかは心ゆくばかり描きて見るべきと(どうにかして感じたままを表現したいものだ)、思ふ折々はべりしを(思う時が何度か在りましたが)、

覚えぬ山賤になりて(おぼえぬやまがつになりて、予期しなかった処遇を受けて賤しい身になって)、四方の海の深き心を見しに(四方の海の深い趣に感じ入って)、さらに思ひ寄らぬ(以前では思い寄らない)隈なく至られにしかど(知り得なかった境地に至りましたが)、筆のゆく限りありて(絵筆が及ばずに)、心よりはことゆかずなむ思うたまへられしを(思うようには描けていないと存じられましたので)、ついでなくて(今まで良い機会もなく)、御覧ぜさすべきならねば(御覧に入れることも出来なかったのですが)、かう*好き好きしきやうなる(このような座に興に任せて持ち出したのでは)、後の聞こえやあらむ(後で何と言われますやら) *こういう言い訳がましい言い方をしても、私は腑に落ちない。マ、私の感想など論外の遙か彼方だが、「須磨」の絵で左方が勝ったというオチはともかくも、ということは幾分は強引ながらも作者は、この時点での宮中の力関係や全体の雰囲気は説明した事は間違いない。続いて師宮の口を借りて述べられる口説口説しい光君への修辞も、遂に此処まで大っぴらに

権勢を誇示できるまでに至った、という情勢は、作者がそう言うのだから受け止めるが、どうしても筆致の古さが好きになれない。しかし、是が平安朝の味わいの一面ではありそうだ。

と、親王に申し給へば(みこにまうしたまへば、親王の師宮に申しなさいますと)、

「何の才も、心より放ちて(気持ちをはきににして)習ふべきわざならねど(習得出来るものではないでしょうが)、道々に物の師あり(道々の名手に従って)、学び所あらむは(教わったことがあれば)、事の深さ浅さは知らねど、おのづから写さむに(自分で真似してみた事は)跡ありぬべし(何か残って身に付いているものでしょう)。

筆取る道と碁打つこととぞ(しかし書筆と囲碁だけは)、あやしう魂のほど見ゆるを(不思議と天分のほどが現れて)、深き労なく見ゆる(大して練習を積んでいないと見える)愚れ者も(おれものも、未熟者も)、さるべきにて(そこそこの出来で)、書き打つたぐひも出で来れど(漢字を描いたり碁を打ったりする類も居るものだが)、家の子の中には(名家の子弟の中には)、なほ人に抜けぬ人(さらに抜き出た人が居て)、何ごとをも好み得ける(このみえける、得意に出来る)とぞ見えたる(ものなのだと思います)。

院の御前にて(みんのごぜんにて、故院の御教育で)、親王たち、内親王、いづれかは(誰しものにも)、さまざまとりどりの才(ざえ、教養を)習はさせたまはざりけむ(習わさせ下さりなさいましたが、)。その中にも、とり立てたる御心に入れて(特に御心に掛けられて)、伝へ受けとらせたまへるかひありて(兄上に御伝授なされた甲斐があつて)、

『文才をば(もんざいをば、漢学は)さるものにて言はず(当然の事として言うまでもなく)、さらぬことの中には(その他の事の中では)、琴(きん、七弦を)弾かせたまふことなむ(御弾きあそばすことこそが)一の才にて(一番優れて)、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、次々に習ひたまへる(全てを会得なされた)』と、主上も思し宣はせき(うへもおぼしのたまはせき、父帝も仰つて御出ででした)。

世の人(宮処中で皆)、しか思ひきこえさせたるを(そのように思い申し致すものの)、絵はなほ筆のついでにすさびさせたまふ(絵はそれでも書筆の合い間の気休めに為さる)あだこととこそ思ひたまへしか(遊び事と思い申ししておりましたが)、いとかう(これほどに)、まさなきまで(不都合なほど)、いにしへの墨がきの上手ども(昔の画所の名人たちが)、跡をくらうなしつ(姿を晦ましてしまつて)べかめるは(いそうなのは)、かへりて、けしからぬわざなり(かえつて不届き千万ですぞ)」

と、うち乱れて聞こえたまひて(態を崩して申しなさつて)、酔ひ泣きにや(酔い泣きされては)、院の御こと聞こえ出でて(故院の思い出話を話し出されて)、皆うちしほれたまひぬ(一同しんみりなされたのです)。

[第二段 光る源氏体制の夜明け]

*二十日あまりの月さし出でて、こなたは、まださやかならねど(地上はまだ明るくならないが)、おほかたの空をかきしきほどなるに(遠くの空に赤みが差す頃に)、*書司の(楽器管理所の)*御琴召し出でて(おんことめしいでて、楽器類を用意させなさって)、和琴(わごん、六弦を)、権中納言賜はりたまふ(権中納言がお引受けなさいます)。さはいへど(何と言っても)、人にまさりてかき立てたまへり(大変優れて御弾きになります)。 *月齢「二十日余(はつかあまり)」の月の出は午前0時を過ぎる。旧暦25日あたりだと月の出が午前2時くらいで午前5時くらいの日の出前の空に明るく見える。此れ以降の下弦の月末から翌月7日あたりの上弦までは月が細くなって明るくないか、見えない。 *「書司(ふんのつかさ)」はく後宮十二司の一つ。後宮の書籍・楽器を管理する司、また司る女官。>と古語辞典にある。 *「琴」は弦楽器の総称でもある。

親王(みこ、師宮は)、箏の御琴(さうのおんこと、十三弦)、大臣(おとど、光君は)、琴(きん、七弦)、琵琶は*少将の命婦仕うまつる。上人の中に(うへびとのなかに、殿上人の中から)すぐれたるを召して(管絃に優れたものを呼び出しなさって)、拍子賜はず(拍子を付けさせなさいます)。いみじうおもしろし(素晴らしい演奏でした)。 *「少将の命婦」は絵合せで梅壺方の論客だった女官だろうか。相当な教養人振りだ。

明け果つるままに、花の色も人の御容貌ども、ほのかに見えて、鳥のさへづるほど、心地ゆき(快い)、めでたき朝ぼらけなり(晴れがましい朝の訪れでした)。禄どもは(絵合せの労をねぎらう褒美の品々は)、中宮の御方より賜はず(中宮から方々へ授けられました)。親王は(師宮は)、御衣また重ねて(おんぞまたかさねて、帝からの褒美の衣服をその他に重ねて)賜はりたまふ(賜りなさいました)。

[第三段 冷泉朝の盛世]

そのころのことには(その頃の宮中の話題といえは)、この絵の定めをしたまふ(この絵合せのことばかりでした)。

「かの浦々の巻は(かのうらうらのまきは、)、中宮にさぶらはせたまへ(中宮がお納め下さい)」と聞こえさせたまひければ(と光君が申しなさいましたので)、これが初め、残りの巻々ゆかしがらせたまへど(中宮はこの絵の前の絵と後の絵の数々を御覧になりたいと仰いましたが)、

「今、次々に(その内に、追々と)」と聞こえさせたまふ(と光君は御答えになります)。主上にも(うへにも、帝におかれても)御心ゆかせたまひて思し召したるを(絵合せを楽しんで居らした御様子であそばしたので)、うれしく見たてまつりたまふ(光君は喜ばしく御思い申し上げます)。

はかなきことにつけても(絵を張り合って帝の御機嫌を伺うという他愛無い事につけても)、かうもてなしきこえたまへば(光君がこのように大袈裟に取扱なさるので)、権中納言は、「なほ(ますます)、おぼえ圧さるべきにや(形勢が圧されてしまうのでは無いだろうか)」と、心やましう思さるべかめり(懸念を覚えなされたようです)。

主上の御心ざしは(うへのきこころざしは、帝の弘徽殿女御への御愛情は)、もとより思ししみにければ(先に馴染んで居らしたので)、なほ(今でも)、こまやかに思し召したるさまを(深く御思い下されているように)、人知れず見たてまつり知りたまひてぞ(権中納言自身は拝し申し存じ上げては)、頼もしく(頼りに思い)、「さりとも(このままずっと形勢が不利にはなるまい)」と思されける(とお思いになっていました)。

さるべき節会どもにも(恒例の季節行事の中にも)、「*この御時よりと(このおんときよりと、今上帝の時代から始まったと)、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむ(後世の人が言い伝えるようなものを加えたい)」と思し(と光君はお思いになって)、私さまのかかるはかなき御遊びも(私事のこうした他愛無い絵合せなどの遊び事も)、めづらしき筋にせさせたまひて(興味ある演出で教養合戦に仕立て上げなさって)、いみじき盛りの御世なり(大変華やいだ時勢です)。*此処で述べられる、今上帝の実績を築きたい、という親心は意外に説得力がある。情愛としては実子である今上帝に事始めの名誉ある功績を与えたく、客観的には弟帝の後見役にして次兄ならではの泥を被ると言う軽さをも演じながら、真に絵画の名人であった光君が恥じも外聞も無く、流浪時の絵を真に寂寥感が表現されている物として出品した、という話の筋なら、兄院への正面切つての宛て付けにはならず何とか及第点に達する筆致かも知れない。何とか、というのは、光君が真に名画伯だと言う事が、どうしても眉唾だからである。最高権力者たる内大臣に対するゆえの評価、としか思えないのは私だけでは無いだろう。スーパーマンの万能に説得力を頼むなら、ドラえもんよろしくどんな筋立ても破綻しない。尤も最高権力者の万能は実話でもあるが。それに形式上の主宰者である中宮は、入道ゆえに大後の地位ではないものの、名実共に帝の母宮であることは間違いない。

[第四段 嗟峨野に御堂を建立]

大臣ぞ(しかし光君にあつては)、なほ常なきものに世を思して(それでも無常なもの世の中を見ていらして)、今すこしおとなびおはしますと(帝がもう少し成人に御成りだと)見たてまつりて(拝見いたしたら)、なほ世を背きなむと深く思ほすべかめる(やはり出家致そうと深くお思いのようです)。

「昔のためしを見聞くにも(昔の例を見聞きしても)、齡足らで(よはひたらで、歳若くして)、官位高く昇り、世に抜けぬ人の(世に抜きん出た人が)、長くえ保たぬわざなりけり(長くはとも栄え続けられないものだ)。この御世には(今の御代での出世は)、身のほどおぼえ過ぎにたり(身の程を過ぎてしまっている)。

中ごろ(少し前に)無きになりて(官位を失って)沈みたりし*愁へに代はりて(しづみたりしうれへにかはりて、下野して悲嘆した分の見返りとして)、今までもながらふるなり(今まで権勢を持ち堪えて来れた)。今より後の栄えは(この先も栄えるとしたら)、なほ命うしろめたし(やはり余命がどの位あるかが心配だ)。静かに籠もりゐて(官職から身を引いて静かに庵に籠って)、後の世のことをつとめ(来世の幸を念じて読経を努め)、かつは齡をも延べむ(同時に長寿を心掛けよう)」と思ほして(とお思いになって)、*「愁へに代はりて今までもながらふる」とは初耳だ。住吉神の浄化力と故院の導きで光君は再生して、生まれ変わって復権したのではなかったのか。そういう論旨でなければ、今上帝が救われない筈ではなかったのか。だが、しかし、既に今上帝は救われたとすれば、早々に身を引いた方が何かと安全そうだ、という心理は分かるような気もする。しかし、しかし、三人の子についての予言も在る事だし、

この御代もまだ安泰とは言い難いだろうし、この時代の気分として絶えず出家の道が平行しているという事は在るにしても、幾らか唐突で分かり難い文ではある。

山里の閑かなるを(田舎の静かな場所を)占めて(しめて、敷地として)、御堂を(みだうを、礼拝所を)造らせたまひ(御造りに為って)、仏(ほとけ、仏像や)経の(きやう、経典の)いとなみ添へて(整備も併せて)せさせたまふめるに(命じなさって御出でのようですが)、

*末の君たち(光君の末子の太政大臣家の十歳の若君と三歳の明石の姫君を)、思ふさまにかしづき出だして見むと思し召すにぞ(十分に御育て上げようと御思いなのでから)、とく捨てたまはむことは(早々に出家なさる事は)、かたげなる(難しそうです)。 *注に<夕霧十歳、明石姫君三歳。>とある。

いかに思しおきつるにかと(如何に御考えで御出でなのかと)、*いと知りがたし(良く分かりません)。 *作者が「知りがたし」では、読者に分かる筈も無い。注に<『完訳』は「源氏の人生の奥行の深さを暗示させる、語り手の言辞」と注す。>とあるが、普通なら作者は主人公の深さを想定した上で読者にそれを暗示させる筈だが、此处では作者自身が光君の人物像を定めかねている様にすら感じさせる。

(2010年5月3日、読了)